

# プロ野球と労働市場

橋木俊詔

昨年のプロ野球は激動の年であった。史上初めての選手によるストライキ、近鉄の消滅と楽天という新しい球団の誕生、ソフトバンクによるダイエーの買収、といったように、過去何十年間にわたって起きていなかったことが、一気に発生したのである。野球の一ファンとして、プロ野球をどう理解したらよいのか、特に労働経済学の立場から議論してみたい。

プロ野球の選手は労働者の就業形態からすると、プロ球団に雇用されているので表面上は被雇用者とみなしうるが、実態は自営業者とみなしたほうがよい。なぜならば、個々の選手が球団と1年ごとに契約して、野球を行うからである。特に重要なことは、選手個人がそれぞれ個別に球団と雇用と報酬額を交渉するので、自営業者の顔が色濃いのである。

ただし、選手側は選手会を結成して、経営側の組織であるNPB（日本野球機構）と団体交渉に似たことを行う。選手会は労働組合として裁判所によって認められているので、通常の労働組合のような行動も可能なのである。ヤクルトの古田会長の下、要求を巡って機構側と交渉した結果、ストライキの決断をしたので立派な労働組合である。当然のことながら、ストライキの賛成投票を選手が行っているのだから、法的にもストは効力を有していた。

一方、経営側はどうか。各球団のオーナーによって組織される野球機構であるが、これは中世ギルドの性格を有したものと見える。なぜならば、新規参入は非常に困難であるし、各球団の財政状況はきわめて不完全にしか公表されておらず、排他的な経営団体といっても過言ではない。しかも、

多くの球団が親企業の傘下にあり、いわば下請け企業のような状況にあるし、球団は親企業の宣伝媒体として機能している。

このように述べてくると、日本のプロ野球業界は、選手側は自営業者で成る選手という労働者と、経営側はギルドの性格を有する下請け企業から成るといえる、きわめて特殊な労使関係にあるといえる。このことが、ごく普通の企業と労働者の間に起こる労使関係と、きわめて異なる様相を示す最大の要因となっている。

プロ野球の選手を普通の労働者と比較すれば、具体的にどのような特色があるのだろうか。第1に、すでに強調したように、一部のスター選手の複数年契約を除いて、毎年毎年雇用契約を行うかを交渉し、かつ報酬額もそのときに決定される。したがって雇用保障は1年しかないし、報酬もその年の活躍ぶりに応じて相当変動する。

第2に、入団のときに契約金が支払われる。現在は最高額は1億円と決められているが、実態はこれ以上の額が一部のスター選手予備軍に支払われている。この風習は裏金の支給として理解されており、巨人・横浜・阪神のオーナーが裏金支給を認めて、失脚したことは記憶に新しい。なお、契約金は普通の労働者でいえば、退職金の入社時払いとみなせばわかりやすい。

第3に、入団時には球団の指名によるドラフト制度があり、ドラフト1位と2位の選手は自由交渉で球団を選べるが、3位以下は自由交渉が認められておらず、指名された球団に所属することが義務づけられている。

第4に、同じ球団に何年か以上在籍した選手は、FAと称して他の球団に移る権利が賦与されてお

り、交渉が成立すれば球団を移動できる。

このように述べてくると、プロ野球選手の労働市場は選手側に自由度が制限されていることがわかる。ごく一部のスター選手とその予備軍は、入団の時に球団を選べるし、後に他球団に移籍する道が開かれているが、ごく普通の選手に限って言えば、経営側の思いのままに動いているのである。

なぜこのようにスター選手とそうでない選手の処遇に大差があるかといえば、野球選手の場合、活躍する選手とそうでない選手との差が非常に大きいということから発生する。1年に20勝あがる投手や50本のホームランを打つ選手と、ゼロ勝やゼロ・ホームランの選手とでは、チームへの貢献度に雲泥の差がある。しかも、その差が数字として選手別に明確なので、査定が比較的行きやすいのが野球である。しかも、これらスター選手は観客動員力が非常に高いので、球団の収入にも大きく貢献している。スター選手が非常に高い報酬を得るのは、経済合理性にかなっているのである。

しかも、プロ野球選手の寿命は短いので、短期間のうちに相当高い報酬を得るということにも合意形成がある。それだけに選手が自分の業績を上げようと頑張るのは自然なことだし、高い報酬がインセンティブとなって逆に選手の活躍を後押しする側面がある。いわばプロ野球選手の処遇が能力・実績主義に徹していることは、別に不思議でもなんでもない。

しかし、人気と実績が非常に高い選手が、どれだけ高い報酬を得ればよいか、ということになると新しい問題が発生する。それは球団経営への影響が大きいからである。無制限に高い報酬を一部の選手に支給すれば、経営が苦しくなることは十分ありうる。それを避けるために、アメリカンフットボールでは、サラリーキャップ制によって、選手総人件費に上限を設けているし、野球のアメリカ大リーグでは高い報酬総額の球団に贅沢税を課している。

わが国もこれらの制度を導入する時期に来ている。これらの政策は球団のチームとしての強さの均衡に役立つし、現在赤字球団の多いプロ野球の経営を改善することに寄与する。ついでながら、

新人選手のドラフト制に関しても、ウェーバー制（前年度の下位チームから順に選手を指名する制度）の導入が必要である。一部の金満球団に有能な選手が集まって、常勝チームをつくることは、決してプロ野球の発展につながらないのである。チームにおける選手の実力が均衡するほうが、勝負を見る者にとっては興味が高まるからである。

プロ野球選手の労働市場を語るとき、一部のスター選手のことは問題にする必要はない。選手である時期に相当高い報酬を得ているので、引退後の生活に困らないだけの貯蓄ができるからである。それに加えて、スター選手にはコーチ、監督、球団職員、あるいは解説者や評論家といった第二の人生も確保されているので、さほど心配はいらない。

むしろ、夢破れて数年で選手生命を絶たれる人のことが気になる。これらの人のほうが大多数派であることは言うまでもない。プロ野球選手を目指す人は、自分の住む世界が実力主義に徹していることを十分理解しているのだから、たとえ選手として大成しなくとも、大なり小なりあきらめの境地に達するのではないかと想像できるかもしれない。しかし、一度脚光を浴びた選手であればなおさら、あるいは一度も一軍に上がれなかった選手であっても、その後の人生をどう生きるかは大変なことである。失礼な言い方になるが、野球しか知らない人の転身はそう容易ではない。

ここで4人の選手を例にして、プロ野球引退後の人生を語ってみたい。

- (1) 高野光：ドラフト1位で東海大からヤクルトに入団、エースとして活躍して脚光を浴びた。その後台湾で野球をし、帰国後野球界での仕事を探したが果たせず、自殺に追い込まれた。
- (2) 小川博：ドラフト2位で青学大からロッテに入団、かなりの成績を挙げたし、コーチも6年勤めた。その後会社に就職して、それなりの昇進もしたが、消費者金融に手を出し、最後は殺人事件を起こした。
- (3) 小林至：東大出身でドラフト下位でロッテに入団するも、芽は出ず退団。その後アメリカに渡ってMBA（経営学修士）を取得し、現在は江

戸川大学助教授として、経営学を教えている。

(4) 大越基：仙台育英高校時代から有名で、アメリカのマイナー・リーグを経て、ドラフト1位でダイエー入団。代走や代打で活躍するもレギュラー選手にはなれず退団。大学に入学して高校教師の資格を取って、高校野球の指導者を目指している。

以上4人の球歴とその後の人生を簡潔に述べてみた。前二者は特殊な例なので一般化できないが、スター選手であってもその後の人生は必ずしも平坦ではないことがあることを示したかったからである。後二者はプロ野球を退団後も、うまく次の人生を見つげられた人の例を挙げて、参考にしてほしいからである。

プロ野球選手の第二の人生はさまざまである。普通の会社員になった人もいるが、野球選手が自営業者だけに商売や飲食業といった個人業主になった人の数が多い。体力と気力も持っているので、自営業という仕事に就くことは理にかなっているといえる。

小林至氏の場合は、本人のもっている特質を生かせる職業に転身できたので、さすが東大卒業生といえるかもしれない。私の知る限り東大卒業のプロ野球選手は4名いる。第1は大洋に入団した新治投手で、野球後は親会社の重役にまでなった。第2は中日の井出選手で、コーチとして活躍した。第3は遠藤良平投手で日ハムに入団したがその後フロント入り。第4はすでに述べた小林選手である。遠藤・小林両投手は東大出という話題づくりの犠牲になった感がしないでもないが、文武両道

を極めていた人たちなので、これらの選手はほとんど参考にならないかもしれない。ついでながら、元プロ野球選手でその後大学教授になった第一号は、元阪神で中心選手として活躍した渡辺博之氏である。同志社大学の体育教授を勤めた。

私がおっとも気に入っているのは大越選手である。プロ野球の選手だった人がその後も野球生活とかかわりをもちたいと思うのは、ごく自然な選択である。高校野球の指導者として働けるのであれば、これにこしたことはない。一昔前であれば、アマチュア野球界はプロの世界にいた人を受け入れなかったが、これは不合理なことなので今では緩和されている。

若いときに野球漬けの生活を送り、スター選手を夢見た人たちの人生は決して無駄ではない。たとえその夢は果たせなくとも、その後の新しい人生にスムーズに転換できれば、それは立派な人生である。20代、30代で職業を変更するのは決して遅くない。要は自分にふさわしい次の職業をいかに見つけるか、そしてそれを成就するための努力をどれだけするかにかかっている。そのためには、野球と全く異なる世界に飛び込むのも一案である。そのときは、すぐに職に就けるとは考えずに、数年間の学業あるいは職業訓練を受けることがあってよい。

元巨人の長島、王両選手、ヤンキースの松井選手、マリナーズのイチロー選手、といったスーパースターの陰に、毎年プロ野球界を去る人が数多くいる。これらの人のその後の人生探求をすることも、労働経済学者の仕事である。

(たちばなき・としあき 京都大学大学院経済学研究科教授)